白山ふるさと文学賞

第十五回　白山市ジュニア文芸賞　受賞作品

【島清部門】

小学生5・6年　小説の部　優秀賞

# 「くまときつねの旅」

松任小学校五年　中山（なかやま）　紗由紀（さゆき）

ある南の森に、ころんくんという名前のくまがいました。ころんくんは、いつも近所のねこの子どもにいじめられていて、遊んでもらえず、毎日一人で絵をかいていました。

ある時、ころんくんは一緒に遊んでくれる友達がほしいと思い、特別な友達を見つけるために世界中を旅することにしました。

「まずは、北の方にいってみよう。」

ころんくんは、雨の日も休まずに歩き続けました。しかし、何日歩いてもだれにも会わないので、ころんくんはと中であきらめてしまいました。

「きっと、だれも友達になってくれない。」

そう思って、つかれて木の下で休んでいた時、ころんくんのおなかがぐーっとなりました。すると

「どうしたの?」

と横から声がきこえてきました。気がつくと自分より小さな一人のきつねが立っていました。ころんくんは、知らないきつねだったので、きつねの顔をちらっと見ただけで返事をしませんでした。しかし、よく見るときつねは自分と同じように一人だったので、話をしてみようと思いました。ころんくんが

「きみは一人なの?」

ときくときつねは

「そうよ。一人でずっと旅をしているの。私おなかがすいたから、よかったら一緒にクッキー食べない?」

ときつねはかたにかけてある、ポシェットからクッキーをとりだしました。ころんくんは、きつねのきどった言い方が、いやだったけどおなかがすいていたので少しだけもらうことにしました。

「いただきます。」

クッキーは円いチョコチップクッキーでしたが、こげていたので、おいしそうには見えませんでした。しかし食べてみると、サクサクしていてものすごくおいしかったのでころんくんは3枚も食べてしまいました。クッキーを食べて少し元気がでたので、ころんくんは自分がどうして旅をしているのか話してみることにしました。

「あのね、ぼく特別な友達をさがして旅をしていたんだ。きみはどうして、ずっと一人で旅をしているの?」

「私は友達がいなくて、お母さんに「友達を作りなさい!」と家を追い出されたんだ。でも、これまで出会った動物たちは友達がたくさんいて、はずかしくて仲よくできなかったの。」

ときつねは悲しそうに言いました。

「そうだったんだ。ぼくたちってなんだか、にているね。よかったら一緒に旅をしませんか?」

ころんくんは、何だかうれしくなってきつねに話しました。きつねはおどろいて

「本当!? 私も一人の旅がさびしかったの。ありがとう。あっ自己しょうかい、まだしてなかったわね。私は、しずくっていうの!東の国から来たの。あなたは?」

「ぼくはころん。よろしくねしずくちゃん。」

こうして二人は、一緒に旅に出ることになりました。

次の日、二人は一緒に森の中を歩いていると、二つの分かれ道がありました。すると

「そうだ。分かれて森をぬけた所まで競走しない?」

としずくちゃんがてい案しました。

「いいね。」

ところんくんもうなずきました。

「よーい、どん!」

二人は分かれ道に入り、走りだしました。

「南にもこんなきれいな森が、ないかな。」

と、ころんくんはつぶやきました。その時バサバサっと音がしました。

ころんくんが空を見上げると、大きな鳥が飛んでいました。
「かっこいい！」
ころんくんは目をかがやかせて見つめていると、鳥は木の中にかくれてしまいました。
「しずちゃんにも見せたかったな。」
ところんくんは残念そうにいいました。
　そして、少し考えたあと
「しずくちゃんに何かプレゼントをしよう！」
と言いました。ころんくんは、どんどん道を進んでいきました。
「何かないかな～。」
といってころんくんが葉っぱをめくると、あるものを見つけておどろきました。
「きのこだ！」
なんところんくんが見つけたきのこは、ただのきのこじゃなく、にじ色にひかったきのこでした。ころんくんは、すぐにきのこをとって走りだしました。
　ころんくんが走っていると分かれ道が一つにつながって、しずくちゃんと会うことができました。
「あっころんくん！やっと会えたね。」
しずくちゃんは、走りながらもしゃべりました。ころんくんもしずくちゃんを追いかけていると、森の出口が見えました。
「ついた～！」
二人はそういって、止まりました。
「一位だ。」
しずくちゃんはうれしそうに言いました。ころんくんは、きのこをかくしてこう言いました。
「あのね、ぼくすごいものをとってきたんだ。」
「えっなになに？」
ころんくんは手からそっときのこを出して言いました。
「森で見つけたにじ色きのこだよ！」
しずくちゃんはおどろきました。
「こんなきのこは見たことないわ。ありがとう！」
しずくちゃんは大切にきのこをポシェットに入れてうれしそうに笑いました。それから二人は一緒に旅を続けて、特別な友達になったのでした。

